

# 描画体験を通じた自閉スペクトラム症者の自己の探索

—描画法とPAC分析を組み合わせた事例研究—

臨床心理学コース 石川 千春

Self-Exploration of the Individual with Autism Spectrum Disorder through the Experience of Drawing  
—A Case Study with a Test Battery of Drawing Method and PAC Analysis—

Chiharu ISHIKAWA

This case study exploratorily examined what kind of self-understanding the individual with autism spectrum disorder (ASD) would have through the experience of drawings. Three sets of test battery surveys including the Self-Portrait Method and Personal Attitude Construct (PAC) analysis were repeated for a woman in her late twenties with ASD. In the first set, she drew a poorly colored picture and clarified her worries. In the second set, she drew a tearful "self" and found herself valuing her emotions more than she had expected. In the third set, she drew a heart with rich colors and other people with facial expressions for the first time. She was more emotionally stable than before and had cognitive changes to think positively. In her real life, she showed changes in her behavior, such as increased interactions with others and stability in her work, indicating changes in her self-understanding. Repeated dialogue with others through the experience of drawing and creative products may promote understanding emotions of individuals with ASD, so it may lead to self-understanding in behavior and personality traits.

## 目次

- 1 問題と目的
- 2 方法
  - A 研究協力者
  - B 自分描画法の援用
  - C PAC分析の援用
  - D 調査の実施
  - E 分析の手続き
  - F 倫理面の配慮
- 3 結果と考察
  - A 自分描画法とPAC分析による自己についての語り
    - 1 第1セット (X年8月～9月)
    - 2 第2セット (X年9月～10月)
    - 3 第3セット (X年10月～11月)
  - B 総合インタビューの結果
    - 1 描画体験の振り返り
    - 2 総合的な解釈
- 4 総合考察
  - A ASD者が感情を描画で表現する意義について
  - B 描画による内的世界の探索と自己理解について
  - C 非言語と言語の相互作用としての示唆
  - D 本研究の限界点と今後の課題

## 1 問題と目的

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下, ASD) は, 米国精神医学会が発行するDSM-5 (精神疾患の診断・統計マニュアル第5版) において「社会的コミュニケーションや対人的相互作用の障害」および「限定された反復的な行動, 興味, または活動の様式」が発達早期より出現し, 生涯にわたって継続する神経発達障害とされる<sup>1)</sup>。わが国では昨今, 成人期にASDと診断される事例が多く, 二次障害や社会的孤立の問題が指摘される<sup>2)</sup>。自己理解ができていないために仕事に対する客観的な選択が困難な事例が多いと論じられる<sup>3)</sup>。すなわち, 社会参加が求められる年代において重要であるとみられる自己に対する理解が, ASD者については成人期において十分に促進されていないことが推察される。二次障害や社会的孤立に陥らないために, ASD者の自己理解の支援に関する打開策を見出すことは喫緊の課題である。

発達の変化の観点から研究を行ったDamon & Hart<sup>4)</sup>によれば, 自己理解 (self-understanding) とは, 主体的自己及び客体的自己という両者についての自己の知識である。本研究においては, 認識される自己という

客体的側面を扱うことから、客体的自己理解に着目して述べる。客体的自己理解は、客体的自己を身体的自己・行動的自己・社会的自己・心理的自己の4つの領域に分けてとらえる概念であるが、その後、このカテゴリーが曖昧だという指摘がなされ、これらの上位領域は身体的・外的属性、行動、人格特性の3つに整理されている<sup>5)</sup>。広汎性発達障害(DSM-5ではASDに該当)を対象とした自己理解の研究<sup>6)</sup>では、それをさらに発展させ、ASD者の障害特性を考慮した自己理解について論じられる。本研究では、これらの先行研究の発展にならって、自己理解を「身体(外的属性)・行動・人格特性の3側面を含む、他者と区別するために認識される自己に対する考え」と定義する。

ASD者の自己理解については、その傾向について示唆される研究がいくつかある。滝吉・田中<sup>7)</sup>は、自己理解質問<sup>8)</sup>で得たデータを、ASD特性をふまえて考案された自己理解分類モデル(Self-understanding model for people with PDD; SUMPP)に基づき、自己理解領域、対人性タイプ、肯定・否定の3つの側面において分類している(PDDは広汎性発達障害の略称)。その結果、他者との相互的な関係を通して自己を否定的に理解し、他者の存在や影響を全く考慮せずに自己を肯定的に理解する傾向があること、障害特性としてのこだわりに関連する「注意関心」の領域が肯定的に自己を理解するにあたり重要な領域となりうることを報告している。また、高岡<sup>9)</sup>によれば、ASD者の自己理解促進のためには他者参照能力が重要であり、他者参照能力を伸ばすためには社交不安を軽減することが効果的であるという。しかしながら、そもそも社会的相互作用に困難を抱えるASD者が、社交不安を軽減して他者参照能力を伸ばすことは容易ではないとみられる。そのためには何らかの工夫を施す必要があるが、彼らの自己理解の傾向をふまえた、支援につながる工夫について検討することが重要である。他者との相互的な関係性の中で自己に対する肯定的感覚を培える場を提供するために、ASD者が示すこだわりなどの興味関心を積極的に活用する重要性が指摘されており<sup>10)</sup>、彼らの興味関心を活かす具体的な方策を見出す必要がある。

そこで筆者は、興味関心を活用しながら他者との相互作用の中で自己理解を深める方策として、ASD者の興味関心を反映する非言語的な表現行為である描画に着目する。描画は、臨床心理学の領域においては芸術療法の一つとして、心理的支援に活用されることが多い。言語によって表現しづらい体験や考えを、絵という非言語的な表現法を使って表出し、外在化するこ

とで、心理臨床的行為を促進する作用がある<sup>11)</sup>。芸術療法はASD者に対しても適用され、自己探索と表現のための安全な治療環境を提供すると論じられる<sup>12)</sup>。その一例として、ASDを持つ18歳の女子高校生に対して芸術療法を行った事例研究があげられる<sup>13)</sup>。芸術療法を継続して行うことによって、ASD者が自己の障害に対する見識や、他者とのコミュニケーション力を増したことが明らかにされている。この事例のASD者は芸術療法を開始した当初、社会的孤立の傾向を表現し、自己を統合する難しさを提示した。しかし創作物を媒介にしてセラピストとの対話を重ね、絵を描くという活動を繰り返す中で、この活動を自身のアイデンティティに取り入れるようになった。ASD特性についての洞察を得て、社会的状況の中でも快適さを感じるようになったことや学校での仲間との関わりを増やすという、自己の認識や社会的相互作用に変化がみられた。事例を丁寧を追うことで、表現行為を通してセラピストという他者との相互作用が生じ、それが日常にも効果をもたらしたとみられる。

以上より、描画といった非言語的表現による自己表現とその創作物を介在して、他者と共有し対話することによって、ASD者は他者との間で安心して自己を探索することが可能となることが考えられる。これまでの研究では、自己理解との関連については明らかにされていないが、描画という非言語的表現を介して自己を探索することによって、自己を肯定的に理解するような変化が生まれ、他者と区別するために認識される自己に対する考えが明確化されたりすることが考えられるのではないだろうか。

そこで本研究では、描画による非言語的表現に焦点を当て、「ASD者は描画体験を通して、どのように自己を探索し、気づきを得るか」をリサーチクエストとし、探索的な事例研究を行う。事例研究とは、各事例の個別性を尊重し、その個性を研究する方法である<sup>14)</sup>。ASD者のように個別性の高い対象に対し、描画を通じた自己の変化を明らかにするためには、事例の経過を丁寧に調べるのが重要であると考え、特定の研究協力者に対し、事例研究を行うこととした。また、描画行為だけでなく、創作物を媒介にした対話によりASD者の語りを得ることから、描画体験を「描画行為と創作物に伴う一連の体験」と定める。描画法と面接法を組み合わせたテストバッテリーを繰り返すことで、ASD者がどのように自己について語り、自己を探索するのかを明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

### A 研究協力者

事例研究においては、研究協力者の選定が極めて重要である<sup>15)</sup>。そこで、以下を選定の条件とした。第一に、ASD特性による生きづらさのバリエーションが多いことである。ASD者を対象とした研究<sup>16)</sup>の仮説モデルで得られた「特性による生きづらさ」の下位カテゴリー《人の輪に入れない》《思いを伝えられない》《人と同じようにできない》《不安定になる》という要素を含んでいることを考慮した。第二に、就労において問題が生じた経験を持つ事例を選定することとした。その理由として、近年、発達障害の中でもASD者が、就労支援で最も多くの課題を所有することが報告されている<sup>17)</sup>ことや、就労に結びつけるためには、自己理解を進める支援が重要と指摘される<sup>18)</sup>ことがあげられる。第三に、自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient; 以下、AQ) の日本語版<sup>19)</sup>の得点が基準値である33点を超えることを条件とした。ASD者を対象とすることから、ASD特性をより自覚されていることが望ましいと考えた。

このような条件のもと、全ての条件を満たしていたAを選定し、本研究の協力の同意を得た。Aは20代後半の女性で、筆者の修士論文の別の研究の協力者であり、前述の「特性による生きづらさ」の全ての要素を抱えていた。筆者とは発達障害の当事者会で会ったことがあり、前述の別の研究について当事者会メンバー限定のSNSにて研究協力の募集告知を行ったところ、自ら志願して研究協力に至った経緯がある。大学卒業後に就職するが、就労上で不適応が生じ、3年前にASDの診断 (診断名はアスペルガー症候群) を受け、会社を退職していた。調査当時、就労継続支援B型事業所 (以下、作業所とする) に通い、グループホームに暮らしていた。感情のコントロールが難しく、作業所への通所は不安定であった。絵は高校の授業以来、描いていなかった。AQ得点は40点で、基準値を超えていた。

### B 自分描画法の援用

描画については、小山<sup>20)</sup>が創案した自分描画法を援用することとした。自分描画法とは、「自分・気になるもの・背景・隠れているもの」という4つの心理的要素を描画で表出させ、「思い」という心の様相を浮かび上がらせる手法である。これを援用する第一の理由は、見えにくい心の部分にふれ得る一つの手法と

されていることからである。小山<sup>21)</sup>によれば、自分描画法を導入することで心理療法における治療の対話がスムーズになったこと、実施の過程において、クライアントの自分への振り返りが比較的短時間に行われ、抵抗なく対象者が抱く思いが深められたことが報告される。このことから、自己理解が難しいとされるASD者にとっても、自分というものにふれ得る描画法であることが考えられ、本研究への適用が妥当と判断された。第二の理由として、絵を描く手順や所用時間などの枠組みが明確であることがあげられる。ASD者にとっては「何でも自由に描いてよい」という指示だと曖昧で困ることが想定されたため、具体的な教示に従って進められる枠組みがあることが望ましいと考えられた。また、これまでASDを対象に自画像を描く研究が報告されており<sup>22)</sup>、自己像をイメージして描く描画法の実施は可能であるとみなされた。具体的には、下記の手順で調査が進められた。

次の教示を順に読み上げ、A4の画用紙と3Bの鉛筆、12色の色鉛筆、12色のプラスチック色鉛筆を使って1枚の絵を描いてもらった。「①自分を描いてみてください。どのように描いても構いません。②今気になっている人や物、出来事などを思いつくままに描いてください。どの場所でも、どのように描いても構いません。③この絵にぴったりする背景を描いてみましょう。④何かが隠れているようです。よく考えてから描いてみてください」

### C PAC分析の援用

本研究は描画行為だけでなく創作物を媒介にした対話によって語りを得ることから、言語化の仕掛けとしてPAC分析<sup>23)</sup>を援用する。PAC (Personal Attitude Construct; 個人別態度構造) 分析とは、個人の態度構造を測定するために開発された研究法である。当人のスキーマに沿った自由連想語の項目に基づいて分析を行うため、自己の体験探索をしやすい利点がある。描画の研究でも用いられ、藤中の研究<sup>24)</sup>では、描画法にPAC分析を導入し、健常成人の自己理解が促進されたと報告される。具体的には、次の手順で行った。

絵が完成したら、PAC分析の連想刺激として、次の文章を提示し、口頭でも読み上げた。「この絵を見て、どのようなことを感じましたか。全体の印象、使用面積や領域、自分について描いた部分、気になっていることについて描いた部分、背景や隠れた部分の特徴、色選び、その他何でも結構です。頭に浮かんだイメージや言葉を思い浮かんだ順にカードに記入してください」

い]。これ以上思い浮かばなくなった段階で、重要だと感じられる順にカードを並び替えてもらった。次に、ランダムに全ての項目のカードの対を選びながら、直感的イメージでどの程度似ているかを判断してもらい、その近さを非常に近い～非常に遠いまでの7段階で評定させた。さらに、全ての項目の類似度行列について、筆者がウォード法によりクラスター分析を行った。統計ソフトにはSPSS (ver. 21)を使用した。2～3週間後の調査時に、クラスター分析の結果であるデンドログラムを提示し、Aと対話を進め、どのようなことが考えられるかを問いながら検討し、解釈を求めた。その語りの中でクラスターを分類し、各クラスターに命名してもらった。分類後、各群に対するイメージ、群ごとの比較、項目全体の解釈などについて質問した。最後に、各項目単独でのイメージが、A自身のイメージとして、肯定(+), 否定(-), 中立(0)のいずれに該当するかの回答を求めた。

#### D 調査の実施

上記の調査法を組み合わせたテストバッテリーは3セット繰り返しられ、調査は合計7回にわたって実施された。全ての調査は、筆者の所属機関の静かな個室にて、X年8月～11月に行った。なお、本研究は東京大学倫理審査専門委員会の承認を得ている。表1に、各回の調査の内容を示す。

#### E 分析の手続き

インタビュー内容は逐語録を作成し、絵を描く様子を観察してメモを記録し、語りの理解に活用した。PAC分析は、内藤<sup>25)</sup>を参考に、各クラスターやクラスター間の比較についての語り、全体に関する語り、各項目の「+」「-」イメージ、描画を振り返っての感想などから検討し、各セットの解釈を行った。さらに、全体の描画体験を振り返ったインタビューを含めて、総合的な解釈を試みた。

#### F 倫理面の配慮

本研究は描画を行うことから、Aとは調査開始前に2度会って、ラポール形成(信頼関係づくり)に努めた。研究協力は自由意志に委ねられ、いつでも取り止めていいこと、具合が悪くなった際の医療機関への案内や個人情報の取り扱いについて説明し、同意書への署名を得た。この際に実施した、Kessler Psychological Distress Scale (以下、K6とする)日本版<sup>26)</sup>は18点で基準値を超えていたこともあり、主治医に研究協力が可能かを事前に確認してもらった上で、調査を開始した。調査は長時間に及ぶことが予想されたため、いつでも休憩をとってよいことをあらかじめ伝えるなど、負担の軽減を配慮した。K6質問紙調査は、約1か月間隔で最終回までに計4回実施し、精神的健康度が悪化していないかを確認した。2回目以降は16点であり、その後、最終回まで変化はみられなかった。

### 3 結果と考察

本研究では、自分描画法とPAC分析を3セット繰り返すことで、Aがどのように自己を探索して気づきを得るかを調べた。以下、その結果について述べる。なお、筆者の質問を〈 〉で、Aの発言は「 」で括ったイタリック体で示し、特に重要と思われる箇所を太字にした。また、Aによって生成された連想語の順番を①②…で記す。

#### A 自分描画法とPAC分析による自己についての語り

##### 1 第1セット(X年8月～9月)

自分描画法の特徴と語り：①「自分について」では、ハートの左半分を紫に、右半分をピンク色に塗っていた。②「気になるもの」では、鉛筆で紙幣、硬貨、鉛筆、しゃべっている人物、小さなハートが描かれた。③「背景」は、「気になるもの」を描いた背景を緑で塗り、「自分」を描いた背景を水色で塗った。④「隠れているもの」では、黒で「自分」の下に人物を3人、

表1 調査の内容

|     |  |
|-----|--|
| 第1回 | 自分描画法(1回目), PAC分析(自由連想語と類似度行列の評定まで)                |
| 第2回 | PAC分析(#1クラスター分析の結果についてのインタビュー), 質問紙調査(K6の2回目)      |
| 第3回 | 自分描画法(2回目), PAC分析(自由連想語と類似度行列の評定まで)                |
| 第4回 | PAC分析(#2クラスター分析の結果についてのインタビュー)                     |
| 第5回 | 質問紙調査(K6の3回目), 自分描画法(3回目), PAC分析(自由連想語と類似度行列の評定まで) |
| 第6回 | PAC分析(#3クラスター分析の結果についてのインタビュー)                     |
| 第7回 | 総合インタビュー, 質問紙調査(K6の4回目)                            |

「気になるもの」の上に人物を3人、描き込んだ。7分12秒で絵が完成された(図1)。真ん中が割れたハートが印象的である。紙幣や表情のない人物など、全体的に無機質に見える。

描画直後、Aは「自分の中で元気な部分と元気じゃない部分みたいなのがあって。なんか、常に悩みの背景には人間がいるなあって思っていて」と語った。

PAC分析の連想語とクラスター分け：連想語は9項目で、簡潔な言葉が並んだ(図2)。検討により、③モノクロ、②つらい、④バラバラ、⑨人がたくさんいる、までがクラスター1(以下、C1とする)として「白と黒の世界」と命名された。①寒そう、⑤荒れている、がクラスター2(以下、C2とする)として「荒廃した世界」、⑥どこことなく色のムラがある、⑦白色の面積が少ない、⑧配色が少ない、までがクラスター3(以下、C3とする)として「原色の世界」と命名された。「+」「-」の評定は、+が3つ、-が6つで否定イメージが多かった。

PAC分析による語り：〈C1について?〉「どこか寂しいような印象…自分がつらいものはモノクロに見えてくる…グループホームの風景に近いところがある/〈C2は?〉「今なんか本当、精神的な荒れっていうのが思い浮かんだというか。感情のコントロールっていうのが自分の中では課題で、ちょっと荒れがちな自分がいるってイメージがどこかにあります」〈C3は?〉「どこか閉じているような感じがあって。…自分の部屋みたいな世界観ですね。…自閉的というか」〈クラスター間を比較して?〉「C1がグループホームで、C2が作業所の印象なのかなって、ちょっとだけ思いました。…C2とC3の共通点、どちらの世界も1人だけ。でも、C2はすごい寂しいイメージがあるけど、C3は全くそんな感じが無い」〈一人でいるのに寂しいのと寂しくないのは、どういう違い?〉「やっぱり、作業所っていうのはみんなで作業していて、みんなできているのに、なんで自分だけできないんだろうって。ある種の寂しさ、自信のなさが浮き彫りになってくる/〈どんなことに見えてきましたか?〉「自分の精神状態、自分のこう、生命力と、そこに自分が置かれている状況が見えてきて、それがすごい目から鱗だったというか。自然とそう描いていたんだな、あるいはそう感じていたんだなって。…やっぱり絵にすると、自分はこういうことに悩んでいたんだなっていうことが見えてきて、それが発見だったと思います。…それまで頭の中でごちゃごちゃしていたものを、絵によってまとめるみたいなイメージがあります」



図1 第1セットの描画

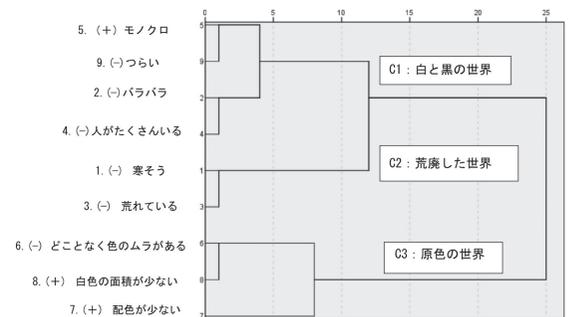


図2 第1セットのデンドログラム

\*注：項目の数字はAが判定した重要度順を示す。以下のデンドログラムも同様である。

第1セットの解釈：各クラスターには、Aが自身の所属する場にどのようなイメージを抱いているかが反映された。「絵にすると、自分はこういうことに悩んでいたんだな」と、日頃の悩みが明確化された。C1にはグループホームでの居心地の悪さが現れ、C2では作業所における苦悩が示された。C3は守られた場かつ閉鎖的な世界として理解された。感情制御の困難として「荒れがちな自己」という特徴が自覚された。

## 2 第2セット(X年9月~10月)

自分描画法の特徴と語り：①「自分について」では、鉛筆で人の形を大きめに描き、その左胸に青いハートを描いた。人物の左下には朱色のハート、青の8つの小さな粒がこぼれるように描かれ、顔は緑で塗られた。②「気になるもの」では、右側に天秤のようなものが紫で描かれ、秤に朱色と青色のハートが乗るように描かれた。③「背景」では、天秤を囲むように鉛筆で正方形、左上に雲と太陽も描かれた。④「隠れているもの」では、下に4人の人物が小さく描かれ、天秤

の右下に 6 つの青いハートが描き加えられた。8分22秒で絵を完成した(図3)。絵は前回より色鮮やかになり、「自分」を表す部分がより大きく描かれた。紙幣などの物質的なものは描かれず、全体的に抽象化され、動きが感じられる。

描画後、Aは「描く前より、描いた後の方がすがすがしい感じ」と語った。「自分の感情を絵で表現できて、なんかこう、手応えがある感じがしますね。前よりも」〈ネガティブな感情は想起されませんでしたか?〉「あったんですけど、絵を描けた満足感の方が大きかった」〈絵のストーリー?〉「左の棒人間が泣いているんですけど、それを赤いハートがキャッチしているのを、傍観者が見ているっていう感じです。…いいものと悪いものを両方測っていて、天秤で。いいことが赤で、悪いことが青」〈悪い方のハートがこぼれ落ちているのは?〉「いいことの方が勝っちゃったから、落ちちゃったのかもしれない」〈落ちたぶん、悪い方が軽くなっている?〉「あー。なんか、こぼれ落ちちゃったから、均等になっている」

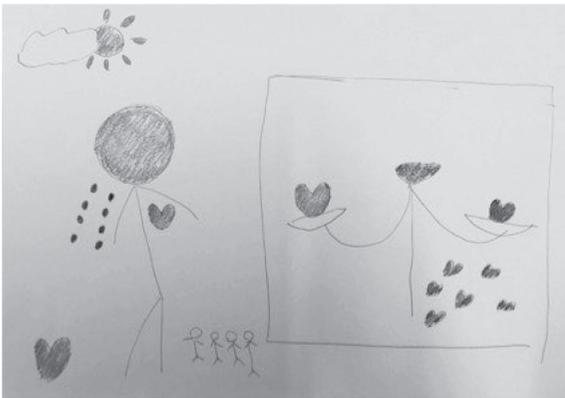


図3 第2セットの描画

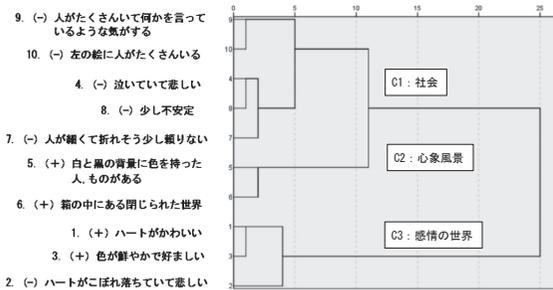


図4 第2セットのデンドログラム

PAC分析の連想語とクラスター分け：10項目の連想語は長い表現が増えた(図4)。+は4つ、-は6つと、否定イメージが多かった。⑧人がたくさんいて何かを言っているような気がする、④左の絵に人がたくさんいる、③泣いていて悲しい、⑤少し不安定、⑩人が細くて折れそう少し頼りない、までがC1「社会」と命名された。⑥白と黒の背景に色を持った人、ものがある、⑨箱の中にある閉じられた世界、がC2「心象風景」、②ハートがかわいい、①色が鮮やかで好ましい、⑦ハートがこぼれ落ちていて悲しい、までがC3「感情の世界」と、名づけられた。

PAC分析による語り：〈C1について?〉「自分の心象風景の外にある世界っていうか」〈C2は?〉「白黒で閉鎖的な感じて、自分の中にあるものっていう感じがします…閉じられた世界の方が安心する」〈C3は?〉「鮮やかな世界観で固まっている」〈C3に重要度の高い項目がまとまったのは?〉「ハート…感情って、すごい、私にとってプラスかマイナスしかないみたいな、すごい極端な世界で生きているので。…悲しいか、好ましいか、みたいな」〈普段の生活と結びつけている?〉「なんかこう、突然悲しくなったりとか、ちょっとしたことで嬉しくなったりとか。中間がないので。…普段の生活からして赤と青しかないなって」〈クラスター間を比較すると?〉「C1は開放的なイメージがあるんですけど、C2は自閉的なイメージがあるというか、すごく対照的。…ただどちらも、寂しい感じがある気がします。私にとっては、C3がむしろ重要。人と話している時の感情の動きのような気がします」〈全体を見ると?〉「C1からC3へと、より内面に近づいてくるというか。…内面世界の方が落ち着くんだなって思います。…社会に出ると落ち着かないというか。…なんかひとつ嫌なことがあると、全部嫌いになるというか。…もう人間が信じられないみたいなことになっちゃって」〈1回目と2回目で、連想語もガラリと変わったが?〉「自分の頭にあることの表現がうまくなってきている気がします。…人に対する怖さっていうのは根強いんだなっていうのがあって。私にとっては、大多数の人というのは、あんまり分かり合えたなっていうのは、今まではあんまりなかったの」〈2回の描画を通して発見は?〉「2回目のC3の世界観は、自分にとって好ましいんですけど、自分の感情を大切にしているというイメージがなかったので、なんかこう、本当は、自分は大切にしてたんだなっていうのがちょっとびっくりしました。…やっぱり自分のことがそんなに好きでないで、自分の感情

もそんなに大切にすってイメージがなかったんです。…感情は感情で、まあそういうのもあるよねって思えば楽なんでしょうけど]

第2セットの解釈：前回より肯定的な心情が示された一方で、対人不安の強さが認識された。今回の気づきとして、C3を「感情の世界」と名づけ、自身の感情への理解が示されたことは大きい。「感情は感情で、そういうものもあるよねって思えば楽」という認知の変化もみられ、内的世界の探索が進み、自己を俯瞰して見ていることが窺えた。対人不安の傾向が「ひとつ嫌なことがあると、全部嫌いになる」と、具体的に明確化され、「自分の感情を大切にしていた」という感情面の自己理解につながったとみられた。

### 3 第3セット (X年10月～11月)

自分描画法の特徴と語り：①「自分」では、左側に黒鉛筆でハートを描き、そのハートの中を赤、ピンク、オレンジ、黄緑、緑、水色、青、紫、黒と斜めに色を塗った。②「気になるもの」では、黒鉛筆で、ハートの下に笑顔と怒っている顔を描き、笑顔は黄色に、怒っている顔は青に塗っていた。③「背景」では、「背景か…」とつぶやき、しばらく考えた後、黒鉛筆でハートを囲むように正方形を描いた。④「隠れているもの」については、枠の右下に小さなハートを描き、右半分を黒に塗った。8分37秒で絵を完成した(図5)。完成した絵は、左面しか使われておらず、右半分は空白だった。シンプルでスッキリしており、ハートがレインボーカラーのようである。これまでと異なり、他者を象徴する顔に初めて表情が現れた。

描画後、Aは「絵を描くことによって、自分が何を考えているのかが具体的になった」と語った。(紙全体を使って描かなかったのは?)「これだけで完結するような気がしたんですよね、なんとなく。今回はなんかこの、絵の中にすっぽり収まるような感じがあって、近くに描きたいような感じがあって」「この境界線でがっつき分けられるんですけど、外の世界には人がいて、あの、怒ったり、ニコニコしている人がいて。で、それを通して、なんかこう、心がいろんな色に反応するというか」「この枠で囲んだ部分は?」「はっきり分けてしまうというか。自分の世界と他者の世界を。なんか、侵入してはならないような」(今までが一番、色が豊富?)「虹っていうイメージがあって。いろいろなことがあったので、1つの色だけだと表しきれないなって」「ライブに行くことがあって、好きな趣味の。6,7人くらい一気に会って、面白かったですね。…自分は劣等感が強くて、こういうところが

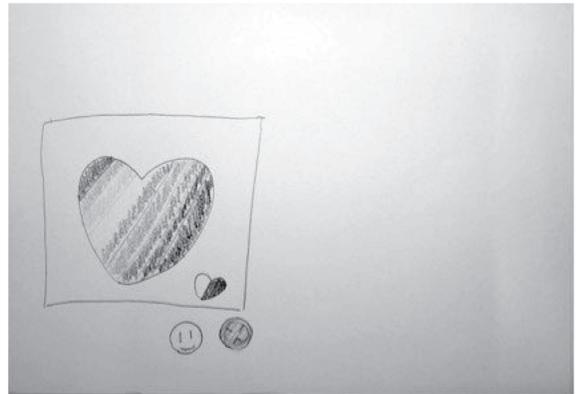


図5 第3セットの描画

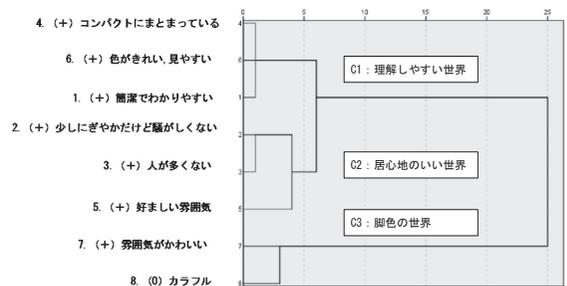


図6 第3セットのデンドログラム

ダメだなんて思ってたんですけど。いろいろ話してて、自分は悪い人間じゃないんじゃないかなって。…いろんな人がいることを知れたのは良かったなって]

PAC分析の連想語とクラスター分け：連想語は8項目で、明るい印象の言葉が並んだ(図6)。+が7つ、中立(0)が1つで、否定がなく、肯定が多数を占めた。⑥コンパクトにまとまっている、③色がきれいで見やすい、②簡潔でわかりやすい、までがC1「理解しやすい世界」、⑦少しにぎやかだけど騒がしくない、⑧人が多くない、④好ましい雰囲気、までがC2「居心地のいい世界」、⑤雰囲気がかわいい、①カラフル、がC3「脚色の世界」と命名された。

PAC分析による語り：〈C1について?〉「なんか、わかりやすさ。私にとっては、わかる、わからないが、すごく重要で」〈C2は?〉「程よい雑音があるっていうか。…音楽を聴きながら一人で散歩するのがわりと好きで、そういうイメージです」〈C3は?〉「自分の心情とかをかわいく描けたのかなってという感じで。…感情の波が激しいっていうのは、私にとってはあんまりいいものではないんですけど、それをなんか、虹色に変えて美化したのかなってという印象があって…自分のグ

ラダーションの感情もよりよく受けとめたいっていう気持ちの現れなのかなって」〈クラスター間を比べて?〉「C1が内面の世界で、C2が外の環境。…C3だけすごく別な感じがして。いいことでも悪いことでも脚色しようとする世界観。…今の置かれているもの、環境も、内面世界もそんなにかわいいものではないのに、かわいく描くっていうのがもう脚色だなんていう感じがする。…自分の環境をポジティブにとらえようとするところでもあったりする」〈C3から見えてくる自己?〉「やっぱり憧れ。こうなりたい願望の表れのような感じ」〈全体を見て?〉「全体的に自分の感情が中心。前よりは周りのことを気にしていない印象があります」〈そうなった理由は?〉「自分でもびっくりしているんですけど。ある種、悩みで、割り切れるようになった。悩んでいても仕方ないなって思えるようになったというか」〈心境の変化に何か影響は?〉「ちょっと注意されたことがあって。作業所のほうで。だんだん、仮に理不尽なことだったとしても、受け入れる必要がなくなって、私は思ったんですね。それでなんかこう、注意されたことも乗り越えられたのは、ある種の成長だったなって思います」〈行動面も変化?〉「グループホームの、夕食会もとりあえず参加しようという気持ちになってきて、なんかこう、行くようになりましたね。感情が前より切り替えられるようになって」

第3セットの解釈：対人関係においてAの行動が広がり、他者と自己に対する見方が多様になっていることが示唆された。このことは絵の色彩が豊かになったことや、他者の表情の描写に表れていた。他者の存在が、漠然と不安を呼ぶものから具体的な感情を伴う存在へと認識されるようになったことが推察される。「自分は悪い人間じゃないんじゃないかな」と、他者交流が増えたことで他者と区別される自己の理解が示された。「自分のグラデーションの感情もよりよく受けとめたい」という肯定的な変化がある一方、それを「美化」し「脚色」しているという自己への俯瞰した見方も示された。外の世界を正方形の線で区切り、他者から自己を守る様子が窺える。感情を肯定的に捉えようとする自己のあり方はまだ始められたばかりで懐疑的であり、他者の侵入を阻みたい心情があると推察される。この両義的な心情から、C3は「脚色の世界」とされたのであろう。また、絵が左側に偏ったことについて、Aは「自分」の近くに全てを描きたかったと語った。Grünwaldの空間図式では、右側は未来、父親、外向性を、左側は過去、母親、内向性といったものを示すとされる<sup>27)</sup>。Aは自己の感情を中心に考えるようになり、

前よりは周りを気にしなくなったと述べた。感情の捉え方が難しかった以前と比べ、自己の内的な世界に目を向けるという変化は確実にあるのだろう。その結果、「感情が前より切り替えられるように」なっており、実生活で他者との交流を増すという行動面の変化、悩みを割り切り、理不尽なことでも乗り切ろうとする認知面の変化が示された。一方で、右が空白であることから、外に向かう能動的な力はまだ乏しいことが考えられる。

## B 総合インタビューの結果

次に、描画体験の振り返りに関する語りの内容を示し、総合的な解釈について述べる。

### 1 描画体験の振り返り

〈3回の描画を振り返って?〉「だんだんこう、自分の感情に深く入って行って、まとまりも出てきているイメージです。どんどん、顕微鏡で覗きみたいな」〈日常でもまとまってきた感覚?〉「絵を描くことで、自分の感情がわかっていく。…あと、最近では感情的にも安定していて、作業所にも安定して休みなく行けるようになったりとか」〈他に気づかれたことは?〉「人そのものが良いものとして描かれてないなっていう印象ですね。…でも最終的に、色で描けるくらいカラフルになっていったので、解釈もそんなにかう、むしろいいものになっているんじゃないかなって」〈描画体験から自身の変化を感じる?〉「前よりたぶん感情的に安定していったんじゃないかなと思いますね。…他者を見ていても、それは自分の感情を通して他者を見ていくわけであって…自分の内面を描くって、すごいひよっとしたら結構ある種しんどかった部分もあるんじゃないかと思って。…それでも好きでしたね。わりと自分を見つめるというのは。…自分を知れたことはよくて、どういうときにしんどい思いをするとか、どういうときに楽しい思いをするとか、そういうのが客観的にわかったら、少し生きやすくなるんじゃないかなと思うんですけども」

### 2 総合的な解釈

描画体験とそれについての語りを繰り返すことによって、Aは自身の悩みの根本に他者が根強く存在すること、自身の感情を意外にも大切に捉えていることに気づき、自己の感情理解が促進されたことが窺えた。感情に対する理解は、内的な自己に対する理解を深めることにつながったことから、日常生活において他者との交流が増え、感情の安定化に伴って作業所への通所も安定したことが考えられた。「他者を見てい

ても、それは自分の感情を通して他者を見ている」という認知の変化は、これまで漠然とした不安の対象であった他者への理解にも変化が現れていることが示唆される。そのため、社会的な場面で「仕方ない」と割り切ることができるという、人格特性における変化が生じたと考えられる。一方で、描画には自己の内面が現れるため、「しんどかった部分もあるんじゃないか」と、推測をまじえて振り返っている。それでも最後まで調査を続けたのは、自己を見つめる動機があったこと、自己の人格特性の傾向を知ること生きやすくなるのではないかという気づきを得たことが明らかとなった。以上より、描画体験と創作物を介在して語りを得たデータから、主に行動・人格特性における自己理解に肯定的な変化が現れたことが示唆された。

#### 4 総合考察

##### A ASD者が感情を描画で表現する意義について

Aは感情制御が難しく、他者との関わりに否定的な思いを抱いてきた。描画では、第1セットで悩みが明確化され、第2セットでは自分の感情を大切にしているという自己が理解された。第3セットでは、感情を肯定的に捉える変化がみられ、感情の安定化が示された。ASD者の感情理解については、定型発達者と比べて感情面の自己認識が低いとされ<sup>28)</sup>、社会的刺激に対する動機づけや注意の指向性に困難があるため感情理解が熟達しにくいという<sup>29)</sup>。Aも感情面の困難を抱えていたが、描画によって感情に注意が向き、捉え直す機会が生まれた。「感情を顕微鏡で覗きみたい」と語ったように、感情の細部に注意が向いて、描画にも他者の表情が描出され、感情理解が進んだとみられる。感情を肯定的に捉える変化から、ASD者が描画を通して感情理解を深める意義があるといえる。

##### B 描画による内的世界の探索と自己理解について

次に、描画によって内的世界を探索するようになった過程と自己理解の変化について検討する。まず、自分描画法が思いを表出しやすい手法であった効果が考えられる。具体的な手続きにより絵を描き進めやすく、心理的要素をありのまま描出できたと推察される。次に、ありのままに表現された絵だからこそ、内的世界が視覚化され、気づきを得る契機となったといえる。さらには、Elkis-Abuhoffの研究<sup>30)</sup>と同様、創作物を媒介にして他者との対話を重ね、描画体験の経過を事例研究として追跡したことにより、自己の探索の

過程を抽出できたと考えられる。Ulman<sup>31)</sup>は芸術活動について、「その原動力は人格の中から生まれ、混沌とした感情や内なる衝動、途方もない心象から秩序を引き出す」と述べる。Aにおいても内的世界が描画として形を成して秩序が生まれ、自己の内的な理解が深まったと推察される。「他者を見ている、自分の感情を通して見ている」という、他者のイメージは自己の感情が生み出したという気づきも、自己理解において重要だったといえる。Elkis-Abuhoff<sup>32)</sup>では自己の障害に対する自己認識の向上はみられたものの、自己理解については不明であった。本研究においては感情理解を発端として自己を探索し、人格特性の側面における自己への理解を深めたことが推察される点で、これまでの研究と異なる知見を得たといえる。

##### C 非言語と言語の相互作用としての示唆

本研究は、描画にPAC分析を組み合わせることで、ASD者の自己理解の変化の可能性を見出した。まず、研究協力者と筆者に加え、絵という視覚的表現を媒介にした三項関係が生まれた。このような手法として、ビジュアル・ナラティヴがある。ビジュアル・ナラティヴとは、「視覚イメージによって語ることであり、視覚イメージとことばのコラボレーションによって語ること」とされ、自分の経験とむすびついた多様なイメージを介して、もの語りを生みやすくなるとされる<sup>33)</sup>。ASD者においては、「経験する自己」という感覚の欠如のために体験されたことが自己の経験として捉えにくい<sup>34)</sup>。しかし、絵を介することで経験を振り返り、他者とのやりとりによって自己に関する語りが促進されることが示された。さらに、PAC分析によって、絵と、絵から想起したことばをもとにしたデンドログラムにより、ありのままの非言語的表現と構造化された言語的表現とを往還しながら検討することとなった。この往還の中で筆者との相互作用も生まれ、自己の検討がしやすくなった。この手法により、ASD者の自己理解につながる自己の探索が可能になることが示唆された。

##### D 本研究の限界点と今後の課題

本研究の限界は、一事例のため、外的妥当性や内的妥当性の点で不十分なことである。自己理解に関する調査に臨むという心構えの中で描画が進められたため、自己理解に関する言及を得やすかったことも考えられる。修士論文の研究として調査を行ったため時間上の制約があり、調査期間が4カ月と短かった点もあ

げられる。描画体験について「しんどかった部分もあるんじゃないか」と語られ、描画を通して見つめたくない自己に直面する場合もあることから、描画を適用する際の留意点をより慎重に考慮する必要がある。どのような描画法を適用するか、その描画をどのように解釈するかについても、より丁寧な検討や解釈、実施者の技量が求められることを反省的に捉え、今後の研究に活かす必要がある。

今後の課題としては、対象や調査期間を拡大し、転用可能性について検討することである。可能性レベルの仮説を、理論として提示できるようにする必要がある。また、描画を適用する際には状態像に加え、動機づけにも着目して、よりASD者の体験に寄り添った、適応的な自己理解について検討することも重要といえる。

## 引用文献

- 1) American Psychiatric Association. 2013. *Desk reference to the diagnostic criteria from DSM-5*. Arlington: American Psychiatric Publishing. (米国精神医学会 高橋三郎・大野裕 (監訳) 2014. 『DSM-5精神疾患の分類と診断の手引』医学書院.)
- 2) 杉山登志郎 2008. 「成人期のアスペルガー症候群」『精神医学』第50巻, pp. 653-659.
- 3) 梅永雄二 2017. 「発達障害者の就労上の困難性と具体的対策—ASD者を中心に」『日本労働研究雑誌』第685号, pp. 57-68.
- 4) Damon, W., & Hart, D. 1988. *Self-understanding in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- 5) 佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 2000. 「幼児期・児童期における自己理解の発達: 内容的側面と評価的側面に着目して」『発達心理学研究』第11巻, pp. 176-187.
- 6) 滝吉美知香・田中真理 2011. 「思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解」『発達心理学研究』第22巻, pp. 215-227.
- 7) 同上
- 8) Damon & Hart, 前掲書 (1988)
- 9) 高岡佑壮 2017. 「高機能自閉症スペクトラム障害を持つ成人が自己理解を深めるプロセスに関する質的研究」『臨床心理学』第17巻, pp. 231-242.
- 10) 滝吉・田中, 前掲書 (2011)
- 11) 藤中隆久 2010. 「バウムテストを利用して自己理解のための体験探索を促進する方法」『心理臨床学研究』第28巻, pp. 303-312.
- 12) Gazeas, M. 2012. "Current findings on art therapy and individuals with autism spectrum disorder" *Canadian Art Therapy Association Journal* 25: 15-22.
- 13) Elkis-Abuhoff, D. 2008. "Art therapy applied to an adolescent with Asperger's syndrome" *The Arts in Psychotherapy* 35: 262-270.
- 14) 下山晴彦 2000. 「事例研究」, 下山晴彦 編著『臨床心理学研究の技法』福村出版, pp. 86-92.
- 15) 同上
- 16) 石川千春 2022. 「自閉スペクトラム症の人は芸術活動でどのような主観的体験を得ているか—自己理解に至るプロセスに着目

- して」『臨床心理学』第22巻, pp. 390-402.
- 17) 障害者職業総合センター 2015. 「発達障害者の職業生活への満足度と職場の実態に関する調査研究」『調査研究報告書』第125号, 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構.
  - 18) 高瀬智恵・今村佐智子・奥村弥生・小脇智佳子・松久眞実 2016. 「発達障害学生の自己理解を進めるためのアプローチ—就労に向けた支援システムにつなげた事例から—」『プール学院大学研究紀要』第57号, pp. 303-317.
  - 19) 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. 2004. 「自閉症スペクトラム指数(AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—」『心理学研究』第75巻, pp. 78-84.
  - 20) 小山充道 2016. 『自分描画法の基礎と臨床』遠見書房.
  - 21) 小山充道 2005. 「自分描画法研究—心理療法における自己像—」『信州大学教育学部紀要』第115号, pp.155-166.
  - 22) Papangelo, P., Pinzino, M., Pelagatti, S., Fabbri-Destro, M., & Narzisi, A. 2020. "Human figure drawings in children with autism spectrum disorders: A possible window on the inner or the outer world." *Brain Sciences* 10: 398-408.
  - 23) 内藤哲雄 1997. 『PAC分析実施法入門—「個」を科学する新技法への招待—』ナカニシヤ出版.
  - 24) 藤中, 前掲書 (2010)
  - 25) 内藤哲雄 1997. 「PAC分析の適用範囲と実施法」『信州大学人文学部人文科学論集』第31巻, pp. 51-87.
  - 26) Furukawa, T.A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., …Kikkawa, T. 2008. "The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the world mental health survey japan." *International Journal of Methods in Psychiatric Research* 17: 152-158.
  - 27) Koch, K. 1957. *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage*. Bern: Verlag Hans Huber, (コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) 2010. 『バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房.)
  - 28) Huggins, C. F., Donnan, G., Cameron, I. M., & Williams, J. HG. 2021. "Emotional self-awareness in autism: A meta-analysis of group differences and developmental effects." *Autism* 25: 307-321.
  - 29) 北洋輔・細川透 2010. 「自閉症スペクトラム障害 (ASD) における感情—非定型発達脳での感情発達に及ぼす社会的経験の役割—」『心理学評論』第53巻, pp. 140-150.
  - 30) Elkis-Abuhoff, 前掲書 (2008)
  - 31) Ulman, E. 2001. "Art therapy: Problems of definition." *American Journal of Art Therapy* 40: 16-26.
  - 32) Elkis-Abuhoff, 前掲書 (2008)
  - 33) やまだようこ 2018. 「ビジュアル・ナラティブとは何か」『N: ナラティブとケア』第9号, pp. 2-10.
  - 34) 広沢正孝 2010. 『成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群—社会に生きる彼らの精神行動特性—』医学書院.

## 付記

本稿は、東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文 (2019年度) の研究の一部をもとに日本質的心

理学会第17回大会において口頭発表を行い、発表での意見をふまえて再分析し、加筆・修正したものです。研究協力者のAさんに厚く御礼申し上げます。

(指導教員 野中舞子講師)